
舞台神聖祝典劇パルジファル

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

舞台神聖祝典劇パルジファル

【Nコード】

N4859P

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ロンギヌスの槍を奪われその槍により傷を負った聖杯城モンサルヴァートの王アンフォルタス。その彼を救えるのは清らかなる愚か者だけだという。その愚か者とは誰なのか。ワーグナー最後の作品を小説にしました。こちらにも掲載してもらっています。

<http://www.painwest.net/>

第一幕その一

舞台神聖祝典劇 パルジフ

アル

第一幕 清らかな愚か者

深い森の中であつた。しかしその中は陰気ではなく、厳かな雰囲気の中にある。その中に一人の白銀の鎧と白いマントに身を包んだ年老いた騎士がいた。

兜で頭を覆つていて顔だけが見える。その顔は皺だらけで髭も真っ白である。目には厳かな光がある。

その彼がだ。己の傍にいる二人の小姓達に尋ねるのだった。それは低い声であつた。

「朝が来たが」

「はい」

「また朝が」

「それでは御水浴場を見てきてくれ」

朝になつたのを確かめてからの言葉であつた。

「いいな、王が来られる前にだ」

「わかりました、ではすぐに」

「今から」

「もう寝台輿の先駆が見えてきた」

見ればであつた。森の奥から彼と同じ姿の騎士達がやって来ていた。老騎士は彼等を見ながら話すのであつた。

「すぐにな」

「はい」

小姓達は彼の言葉に従いその場を後にした。彼等と入れ替わりに二人の騎士が来た。老騎士は彼等に対して問うのだった。

「アムフォルタス王はどんな御様子だ」

そしてさらに言うのであつた。

「早朝から御水浴とはあの女の薬草が痛みを和らげたのだな」

「いえ、グルネマンツ様」

「それが」

騎士達は晴れない顔で彼の言葉に応えた。

「傷口が激しく痛まれた為」

「その為に一睡もできず」

こう話すのだった。

「それでも是非御水浴をと」

「そう仰いまして」

「そうか」

グルネマンツはそれを聞いてまずは辛い顔になった。

「やはりな」

「残念ですが」

「やはりあの傷は」

「わかっておる」

グルネマンツは目を閉じ首を横に振って述べた。

「あの傷を癒す方法は一つしかないのだ。どんな薬草でも水薬でも
だ」

「効き目はありません」

「では」

「何はともあれだ」

グルネマンツはここでは答えなかった。その代わりに言うのだった。

「御水浴だ」

「わかりました」

「それでは」

騎士達も彼の言葉に応える。しかしここで小姓達が戻って来てだ。

グルネマンツに対してあることを告げてきたのであった。それは。

「グルネマンツ様」

「あの女が戻りました」

「クンドリーがです」

「そうか」

グルネマンツはそれを聞いて静かに頷いた。すると黒いぼろぼろの服に伸ばし放題の乱れた黒髪の方がやって来た。裸足で化粧気もなくまさに野生だ。その女が来たのだ。

顔は整っている。黒い目の光は強く全体的に妖艶ですらある。だがその姿はまさに獣であった。顔色は朱を帯びた褐色で服の帯は蛇の皮だ。服はくるぶしの裾の辺りが乱れて破れている。

その女がグルネマンツの前に来てだ。言うのであった。

「持って来ました」

「これをか」

「はい、バルザムです」

こう告げて彼にその水晶の容器を差し出すのであった。

「どうか」

「これは何処にあつたのだ？」

「想像もつかない遠方からです」

その強い光を放つ目と共に言うのだった。

「そこからです」

「また持って来てくれたのだな」

「これ以上の薬はもう何処にもありません」

女はこうまで言った。

「ですがまだご所望なら」

「いや、今はいいい」

グルネマンツはこう女に告げた。

「クンドリーよ」

「はい」

「今は休むのだ」

そして名前も呼んでみせたのだった。

第一幕その二

「御苦労だった」

「それでは」

「王が来られる」

グルネマンツはその女クンドリーに告げた。

「悪いがそちらに向かう」

「はい、それでは」

「休むがいい」

やはり彼女には優しい言葉をかけるのだった。

「よいな」

「わかりました」

クンドリーはその場に前のめりになって倒れ込んだ。そのうえで眠りに入る。泥の如く眠りその間にだ。グルネマンツは顔を王の一行に向けるのだった。

「おいたわしや」

「何ということか」

「アムフォルタス王よ」

彼だけでなく騎士達や小姓達も悲しい顔で言うのだった。見れば彼等と同じ白銀の鎧兜や白いマントの騎士達と白い服の小姓達がつその寝輿に乗って黒い髪と茶色の髭の厳しい男がやって来た。その顔は重厚であり威厳と気品も兼ね備えている。そして寝ていても長身であることがわかる。彼がアムフォルタス王だった。

「誇り高い武勲優れた方が」

「あのように寝込まれて」

「惨い話だ」

「よし」

ここで王は輿から身体を起こして述べてきた。

「ここで少し休もう」

「ここで、ですか」

「休まれるのですね」

「そうだ。少し休もう」

周りの騎士や小姓達の問いに答えての言葉であつた。

「そしてだ」

「はい、そして」

「今は」

「激しい痛みの夜を明かした後は森の朝景色も一際素晴らしく見える」
その森の空気を感じながらの言葉だ。それは確かに爽やかで美しいものであつた。

「あの神聖な湖の水を浴びれば」

「はい、御身体も」

「きつと」

「この身体を元氣付けてくれよう。痛みが和らげば苦しい夜の暗さも明るくなる」

「王よ」

ここでグルネマンツが彼の前に出て来た。そのうえで先程のクンドリーのバルザムを差し出してきたのである。

「どうかこれよ」

「それは」

「王の為にアラビアから届けられたものでございます」

「アラビアからか」

「その通りです」

王の前に片膝をついたうえで差し出していた。

「これをです」

「そういえばだ」

王はここで言うのだつた。

「ガーヴァンもまた薬草を取りに行っていたな」

「はい、今は」

「行っております」

「クリングゾルの罫にかからなければいいが」

王は周りの者達の言葉に憂いのある顔で返した。

「それが心配だ」

「そういえばです」

「王よ」

騎士達が彼にまた言ってきた。

「あのことは」

「どうなのでしょうか」

「共に悩みて悟りゆく」

王は彼等の言葉を受けて静かに呟きはじめたのだった。

「純粹無垢の愚か者か」

「はい、その者です」

「その者は」

「今の私には正体がわかる気がする」

「ここでこんなことを言う王だった。」

「その者はだ」

「はい、その者は」

「何なのでしょうか」

「その男を死と呼ぶのだろうか」

沈んだ表情での言葉だった。

「我等は」

「その様なことは仰らず考えられないことです」

「だがここでグルネマンツは王に厳しい言葉を進言するのだった。」

「心が沈んではです」

「そうか。そうだったな」

「そのバルザムにしろです」

そして彼は話をそのバルザムに移したのだった。王の気持ちを暗いものから逸らす為である。

第一幕その三

「この者が持つて来ました」

「クンドリーがか」

「そうです」

その倒れ伏したままのクンドリーを指し示しての言葉であった。

「アラビアの果てからです」

「そうか、済まぬな」

王はそれを聞いて申し訳なさに満ちた顔で述べるのだった。

「そこまでもらつてだ」

「はい、それでは」

「このバルザムを使ってみよう」

王はそのバルザムを受け取つてから言つのだつた。

「クンドリー、礼を言つぞ」

「御礼なぞは」

クンドリーは獣の様に起き上がつて王に顔を向けて応えた。

「ただ、それを使って頂ければ」

「済まぬな、それではだ」

「はい、それでは」

こうして王達は湖に向かう。グルネマンツ達はそれを頭を垂れて見送る。そして一行が過ぎ去つてからだ。グルネマンツはクンドリーに対してまた声をかけるのであつた。

「クンドリーよ」

「今度は何でしょうか」

「いつも済まぬな」

穏やかな目を彼女に向けての言葉だつた。今彼女はまた顔をあげている。倒れ伏したままだったが徐々に起き上がつてもきていた。

「本當にな」

「ですが御礼なぞは」

「いつも我々を助けてくれる」
「こつも彼女に告げた。」

「常に誰よりも先に出て知らせをくれて誰よりも遠くに行つて王の為のものを持つて来てくれる」

「しかしこの女はです」

「魔女で異教徒ですが」

「それでもなのですね」

「そうであるう」

グルネマンツは周りの騎士や小姓達にも応えはした。

「しかしだ」

「しかし？」

「しかしなのですか」

「そうだ、しかしだ」

そして言つのだつた。

「今この女はこの聖地で暮らしているな」

「それは確かに」

「その通りです」

「そういうことだ」

穏やかな声での言葉であつた。

「ではそれでいいではないか」

「いいのですか」

「それで」

「そうだ。いいのだ」

言葉はそのまま穏やかなものであつた。

「心をあらためてこれまでの罪を購うものならばな」

「それでは」

「今は」

「ここにいてもいい。この女の贖罪は善行そのものだ。我々への助けはそのまゝ彼女を救つてゐるのだ」

「しかしです。思つのですが」

「そうだな」

小姓達は顔を見合わせて言い合いだした。

「この女がいない時に」

「我等にとつて多くの苦難が起こっています」

「これは」

「それはあるな」

このことはグルネマンツも否定しなかった。

「この女がこの聖域からいない時には」

「はい、その時にです」

「常にです」

騎士達も小姓達も言う。

「我等にとつてよからぬことが起こっています」

「常にです」

「わしも先の王もだ」

ここでグルネマンツはあらたな人物の名前を出したのだった。先の王というのだ。

「ティートウレル王だが」

「先王がですか」

「あの方もまた」

「あの方が聖杯の城モンサルヴァートを築かれた時」

語るグルネマンツの目は遠くを見ていた。それは彼にとってはまさに最初の喜びであった。

第一幕その四

「その時にはだ」

「もういたのですか」

「この女が」

「森の茂みの中でまどろんでいた」

実際にその時の光景を語るのだった。

「その時既に死んでいる様で生気もなかったのだ」

「そうした状況だったのですか」

「この女は」

「そしてあの時もだ」

グルネマンツのその目に今度は怒りが宿ったのだった。

「あの不幸が起こった時だ」

「山の向こうにいる不貞の輩が」

「王を傷つけたその時ですね」

「その時にもこの女は森の茂みに倒れていた」

クンドリーを見ての言葉であった。

「御前はあの時何をしていたのだ」

「何を、ですか」

「そうだ。我等が槍を失ったその時にだ」

その時のことを話すのであった。

「御前は我等を助けなかったのは何故だ」

「私は助力はしません」

だがクンドリーはこう答えたのだった。

「それは決して」

「しないというのか」

「はい」

まさにそうだというのである。

「その通りです」

「そうなのか」

「この女にあの槍を奪い返せというのは」

「できないのでしょうか」

「それだけ誠実で力もあるのなら」

「それはまた別の話だ」

しかしグルネマンツは暗鬱な顔に戻って首を横に振ったうえで騎士達や小姓達に答えた。

「それはだ」

「違うのですか」

「それは、だ」

「あの槍をあの人から奪い返すのは誰にもできはしない」

「誰にも」

「できないと」

「そうだ、できはしない」

こう語るグルネマンツだった。

「主の傷の奇跡がこもったあの神聖な槍はだ」

「恐ろしいことに」

「今は」

「世にも汚れた者が手に入れてしまっている」

グルネマンツだけでなく他の者達も嘆いていた。

「その通りです」

「恐ろしいことにです」

「豪勇至極なアムフォルタス王があたの槍を手には妖術師クリングゾルを討ちに向かった時に」

グルネマンツの声の嘆きはさらに深まる。

「誰がそれを阻止し得たか」

「それは」

「とても」

「できはしなかった」

こう語るしかなかった。

「恐ろしい美女に魅了され陶然としたその時にだ」

「槍を落とされたと聞いていますが」

「誰も見ていませんが」

「全てあの男の魔力だった」

「グルネマンツは自然にその目を閉じていた。」

「そう、全てはだ」

「そしてその魔力によってあの男は」

「槍を」

「わしが駆けつけた時には槍は既にあの男の手にあった」

「そして王は倒れられていて」

「そうしてですね」

「その通りだ」

今度は己の言葉に悲しみを込めるグルネマンツであった。

「わしは奮戦し血路を開き王と共に逃れたがだ」

「王はその時に」

「あの傷を」

「王の脇のあの傷は火の様にうずき」

言葉には嘆きも入っていた。複数のそうした感情の中での言葉であった。

第一幕その五

「それは二度と閉じようとはしないのだ」

「そうなのですか」

「そして今も」

ここで小姓が二人来た。先程グルネマンツが送ったあの二人の小姓だ。グルネマンツはすぐに彼等に対して心配する顔で問うのだった。

「それで王は」

「はい、お元気になりました」

「御水浴とバルザムで」

「左様か」

それを聞いてまずは少し安心したグルネマンツだった。しかしであつた。

「だが、それもだ」

「はい、傷は」

「完全には」

「仕方ないことだ。それは」

「ところでなのです」

ここで騎士の一人が彼に問うてきた。

「宜しいでしょうか」

「何だ？」

「グルネマンツ殿はあの男の顔を御存知なのですね
このことを問うたのである。

「それは」

「そうだ。知っている」

その通りだというのであつた。

「それはだ」

「ではあの男のことは」

「それも御存知なのでしょうが」

「うむ、知っておる」

彼自身のことについても知っているというのである。

「それもだ」

「では一体」

「どういった男だったのでしょうか」

「信仰篤い勇士であられる先王こそだ」

グルネマンツはここでまたティートウレルのことを話に出した。

「あの男をよく御存知であられる」

「先王がですか」

「よく」

「そうだ。御存知であられる」

こう話すのだった。

「その理由はだ」

「それは」

「どういったものでしょうか」

「野蛮な敵達が策略や暴力を以てこの神聖な信仰の国を脅かすに至ったその時にある厳かな神聖な夜に先王の頭上に主からつかわされた使者達が現われ」

「使者たちにより」

「あれが」

「その通りだ。あの聖杯」

槍、そして聖杯。二つのものが今揃った。話の中だが。

「主が最後の晩餐で使われ十字架にかけられた時にその至尊の血を受けた」

「あの神聖にして崇高な杯」

「あれこそが」

「そうだ。そこに至尊の血を流させた槍をも流させて」

グルネマンツは話を続けていく、

「あの受難を形作った二つを先王に与えて下さったのだ」

「それこそが」

「我がモンサルヴァートの」

「先王はこの二つの聖なるものの為にモンサルヴァートを建てられたのだ」

「そして我々は」

「そこに仕える」

騎士達も小姓達も今感じ取っていた。このことを。

「そして護る」

「それが役目ということなのです」

「そうだ。聖槍と聖杯に仕える御前達はだ」

グルネマンツもその通りだと話すのであった。

「罪深い者達が見出せないようすな道を辿ったからこそなれたのだ。ここに至るにはだ」

「純潔な者だけが」

「その者だけが」

「その通りだ。そうした者しか許されないのだ」

まさにそうだというのだ。

「我等は救済という最高の務めの為に聖杯の靈験を受けられる」

「その通りですね」

「我々はその為に」

「わかるな。しかしグリングゾルはだ」

あらためて彼の話される。

第一幕その六

「聖杯騎士の仲間になることを求めどれだけ務めようともそれではできなかつた」

「それは何故でしょうか」

「一体」

「まず異教徒だつた」

それが理由の最初だつた。

「そして心に邪なものが強かつたのだ」

「邪なものがですか」

「それが」

「そうだ。それが強い為にだ」

こう話していくのであつた。

「彼はその異教徒達の間で罪を犯し過ぎたのだ」

「そしてその結果ですか」

「モンサルヴァートに入られなかつた」

「遂にはあの山の向こうの谷間に移り住む様になり」

今そのクリングゾルについての話であつた。

「そこで懺悔を心掛け聖者になろうとした」

「それでもなのですね」

「結局は」

「己が身に宿る罪を絶つ力がない故に」

語るグルネマンツの顔が歪んだ。

「罪深い手を我と我が身に加えて在任となつたのだ」

「何と……」

「その様なことを」

「何をしたかはわかるな」

グルネマンツはあらためて周りの者達に問うた。

「あの男が何をしたかは」

「はい、よく」

「それは」

「その通りだ。そのうえで聖杯グラールを欲したのだ」

「恐ろしいことです」

「罪を犯しながら」

「しかし先王は」

ティートウレルがどうしたかであった。

「それをはねつけられた。あの男はそれに怒りあの場所だ」

「あの場所を作ったのですか」

「墮落と退廃のあの場所を」

「その通りだ。そうして今に至るのだ」

こう話すのであった。

「邪悪な魔力を生かすべき方策を巡らし遂にその邪な考えを見出したのだ」

「あの園はそのうえで出来上がったのでしたか」

「あの男のそうした経緯のうえで」

「魔性の美女達が多くいて」

今度はそこがどういった場所かの話であった。

「クリングゾルはそこで聖杯の騎士達を待ち」

「我等を」

「そうして」

「邪悪な快楽と地獄の恐怖の中へ騎士達を引き込もうとした」

彼等にとって恐ろしい話はさらに続く。

「誘惑された騎士達は既に数多い」

「嘆かわしいことに」

「それは」

「戻って来ることもなくだ」

そこに留まっているというのである。

「先王は御高齢故にアムフォルタス王に譲位されていた」

「そして王が」

「あの男に対して」

「魔の禍根を断ち切ろうとされたが」

「槍があの男の手に」

「そういう次第だったのですか」

「そうだ。あの男は槍を手に入れてしまった」

聖槍をだ。持っているのであった。

「そうして今に至るのだ」

「では何としても」

「あの槍を」

「聖槍を奪われ孤影悄然たる聖杯の前で」

グルネマンツの話がここで変わった。

「王は熱心な祈りを捧げながら慄く御心で救いの験を切願された」

「そうして」

「何があつたのでしょうか」

「その時のことだ」

また語るグルネマンツであつた。

「天の光が聖杯から出たかと思うと」

「そして」

「何が」

「神聖な夢幻のお姿が浮かび出て」

「主の」

「それがなのですね」

「その通りだ」

まさにその主が出て告げたというのである。

第一幕その七

「王に対してこう告げられた」

「何とでしようか」

「そのお告げは」

「それは鮮やかに読み取れる神託の文字だったのだ」

グルネマンツの語るその言葉にさらに峻厳さが宿っていた。

「共に悩みて悟りゆく、純粹無垢な愚か者」

まずはこの言葉であつた。

「かかる者を待て。我の選べる者ならば」

「共に悩みて悟りゆく」

「純粹無垢の愚か者がですか」

「そうだ、その者がだ」

こう語るのであつた。

「その者こそが王を救われるのだ」

「清らかな愚か者こそが」

「王を」

騎士達も小姓達のその者のことを思わざるを得なかった。そしてその時だった。

「何ということをしたのだ」

「何と酷いことをだ」

湖の方から声がしてきた。

「早く捕まえろ」

「あの若者をだ」

「どうしたのだ？」

話し終えたグルネマンツはそちらに顔を向けた。

「一体何があつたのだ？」

「あそこに」

「白鳥が」

「白鳥が傷ついている」

「馬鹿な」

グルネマンツはそれを聞いて眉を顰めさせた。

「神聖なこの場所で鳥を撃つなどとは」

「はい、これは一体」

「どういうことでしょうか」

白鳥は傷ついていたが何とか無事だった。小姓の一人が彼を拾い刺さっている矢を抜きそのうえですぐに別の小姓達が薬や包帯を出して手当てにかかった。これで何とか難を得た。

「無体なことをする奴がいるものだ」

「一体誰がしたのだ」

「誰がだ」

騎士達も眉を顰めさせずにはいられなかった。

「この様なことを」

「誰がしたのだ」

「それはです」

湖の方から一人の騎士が来てグルネマンツ達に話してきた。

「この白鳥が湖の上に輪を描いて飛んでいるのを王が吉兆として喜んでおられたのですが」

「それがなのか」

「はい、そうです」

「この男です」

「この男がしました」

湖の方から多くの騎士達や小姓達がやって来て口々に言う。見ればその中央には褐色のみすばらしい上着にズボンの背の高い若者がいた。波うつ豊かな金髪を猛々しく伸ばし後ろに撫で付けている。彫のある青い目は今は虚ろな光を放っている。顔は引き締まっているが何もわからない様である。唇は小さく鼻が高くしっかりとした形だ。そして身体は騎士達と比べても全く遜色ないまでに引き締まっている。

騎士達や小姓達は彼をグルネマンツの前に引き立ててだ。さらに言うのであった。

「この男が射ました」

「それがこの弓です」

「これによつてです」

一人が弓をグルネマンツに見せながら語る。

「そして矢もです」

「これによつてです」

「白鳥を射たのは御前なのか」

「空を飛ぶものならどんなものでも射てみせる」

若者はグルネマンツの問いに胸を張って答えた。高く澄んだ強い声であつた。

「そう、どんなものでもだ」

「御前がしたことだ」

グルネマンツは若者を厳しく咎めながらさらに問うた。

「何も思わないのか」

「この男を罰するのだ」

「このモンサルヴァートにおいてかつてなかったことだ」
グルネマンツは厳かに語った。

第一幕その八

「こうしたことはだ」

「その通りです」

「何という男なのか」

「御前はだ」

グルネマンツは若者をさらに責めた。

「この神聖な森の中で何をしたのかわかっているのか」

「何をとは？」

「静かな平和が御前を囲んでいたな」

「平和を」

「そうだ、平和をだ」

こう若者に話していく。

「その中でこの森の鳥や獣達はどうしてきた」

「それは」

「そうだな。御前に危害を加えることはなかった」

まずはここから話すのだった。

「それはだ」

「それはその通り」

若者はまだぼうつとしたままではあったが答えはした。

「僕に何も」

「御前を親しげに、穏やかに迎えてくれたな」

「その通りだった」

「この誠実な白鳥が御前に何をしたか」

その傷つき悲しい顔になっている白鳥に顔を向けての言葉だった。

「相手の雌を探しその妻と共に湖の上で弧を描いて飛んでいたな」

「そうしていた」

「しかし御前はだ」

若者をさらに咎めるのだった。

「その白鳥を射たのだ。何の感嘆も持たずにだ」

「そうだったんだ、僕は」

「そしてだ」

さらに話す若者だった。

「腕白小僧の弓矢遊びの気持ちしかなかったのか」

「僕は」

「我々には可愛い鳥だ」

今度は白鳥をいとおしげに見ていた。

「これを見る。白鳥の傷を」

「その傷を」

「まだ血が残っている。身体も弱くなり羽根も汚れ」

まさにグルネマンツの言葉通りだった。

「悲しい目は。わかるな」

「それは」

「御前の罪の深さにわかったな」

こう若者に話していく。

「何故こんなことをした」

「罪なんて知らなかった」

だが彼はこう言うのだった。

「そんなことは」

「それでは何処から来た？」

「わからない」

「では父親は誰だ？」

「それもわからない」

言葉は同じであった。

「それも」

「では誰から教わりここに来た」

「それもわからない」

「では名前は？」

「名前は沢山あった」

返答は変わった。しかしであつた。

「けれど一つも覚えていない」

「つまり何もわからないのか」

グルネマンツはこのことだけがわかつた。

「つまりは」

「何も」

「これだけの愚か者はクンドリーの他には知らん」

ここでまた倒れ伏したまま寝ているクンドリーを見るのだった。

「まあい。それではだ」

「はい」

「王の元へ」

小姓達がグルネマンツの言葉に応えた。

「今から行きます」

「そして白鳥は」

「湖で癒されるだろう」

グルネマンツは穏やかな口調で述べた。

「だからだ」

「はい、それでは」

「白鳥もまた」

小姓達も騎士達も向かう。後に残ったのはグルネマンツにクンドリー、それに若者の三人だけになった。グルネマンツはまた若者に對して言う。

第一幕その九

「御前は何も知らないのか？」

「知らないのかって？」

「言い換えれば何か知っているか？」

「こう問うたのである。」

「何か知っていることを言ってみるのだ」

「母さんの名前を」

「それは知っているというのだ。」

「知っている」

「ではその名前は何か？」

「ヘルツェライデ」

「この名前を出すのであった。」

「そして僕は森の中や荒野で育った」

「ではその弓は誰に貰った」

「自分で作った」

「そうだというのだ。」

「これがあれば荒鷲達を森から追っ払える」

「そうして何も知らないまま育ったが」

「グルネマンツはあらためて若者を見た。その彼は。」

「品も悪くないし家柄もいよいよだな」

「品？家柄？」

「御前の母は何故もつとましな弓矢を使わせなかったのか」

「この子を産んだ母は」

「ここであった。クンドリーが不意に顔をあげてきた。そうして若者を鋭い目で見ながら少しずつ話してきたのであった。」

「父ガムレットが死んだ後だった」

「ガムレットか」

「知っているのか」

「名前は聞いたことがある」

それはグルネマンツも知っている者だった。

「名高い騎士だったな」

「だが死んでしまった」

「そうだったな」

静かに頷いて答えたグルネマンツだった。

「だがそれも神の御心だ」

「母は我が子が父の様に勇士になり死ぬことを恐れた」

そのヘルツェライデに関する話だった。

「そしてその為に」

「どうしたというのだ？」

「全ての武具を遠ざけた」

そうしたというのだ。

「人気のない荒野の中で愚か者になれと育てた」

「そしてか」

「そう。そうしてこの若者を育てたのだ」

「そうだった」

若者はここで思い出したようにして言葉を出してきた。

「僕はある時森の脇を見事な馬に乗った立派な人達が通り過ぎるのを見た」

「騎士達をだな」

また言う彼だった。

「それをか」

「僕もああした風になりたいと言うとその人達は笑顔を向けてくれた」

その時のことを思い出しながらの言葉だった。

「僕はその人達を追い掛けてここまで来た」

「この聖地にか」

「そうだ。ここに来た」

こうグルネマンツに話す。

「度々暗くなつて明るくなつた」

「夜と昼か」

「弓は獣や大男の為に使つた」

「その通りだつた」

クンドリーは完全に起き上がった。そのうえでグルネマンツを若者の間に來てそのうえでまたゆつくりと話したのであつた。

「どんな獣も巨人も盜賊も」

「この愚か者は倒してきたのか」

「弓でも力でも適わなかつた」

そうだつたとグルネマンツに話すのだ。

「皆彼を恐れた」

「僕を恐れている」

これはパルジファルには思いも寄らないことだつた。話を聞いても少し戸惑つていた。そうしてそのうえで言うのであつた。

「誰が」

「悪人達が」

「それなら」

それを聞いてまた言う若者であつた。やはり何も知らない顔である。

「僕が倒してきたのは悪人達だつたのか」

「その通り」

「では善人は」

パルジファルはここでそれとは逆のことについて考えた。

第一幕その十

「誰なんだ」

「御前の母」

クンドリーは一言で述べた。

「御前は母上のところから出たが彼女は御前のことを心配し悲しんでいる」

「母さんが」

「そう。そして」

「そして？」

「母は死んだ」

こう若者に告げた。

「もういない」

「いないのか」

「そう、私は見た」

クンドリーは若者に対して話していく。

「彼女が息を引き取るところを」

「母さんが」

「そして私に御前を頼むと言ってきたのだ」

「そんな、母さんが」

「落ち着くのだ」

グルネマンツは話を聞き終えて肩を落とした若者の傍に来た。そうしてそのうえで彼に対して優しく言うのであった。

「今は」

「母さん……」

若者は涙を落としそうな顔になっていた。

「そんな。僕は」

「悲しみはわかるが」

グルネマンツは彼を慰める。クンドリーはその間に傍の泉に向か

い角杯の中に水を汲んできてそのうえで若者に差し出したのだった。その前に彼の頭にその水を少しかけた。

「水を」

「それはだ」

グルネマンツはまた彼に語った。

「聖杯の恵みの方式だ」

「聖杯？」

「悪を報いるには善を以て行う」

グルネマンツは語った。

「そうしてこそ悪は清められる」

「私は」

だがクンドリーはそれを聞いて言うのだった。

「そんなことは決して」

「しないというのか」

「もう休みたい」

そしてこうも言うのであった。

「今は」

「ではどうするというのだ？」

「またここで」

グルネマンツの言葉に応えながらであった。そのうえで再び身体を仰向けに寝かせてであった。そのうえでゆっくりと眠りに入るのであった。

ここでまた王の寝輿が来た。騎士達や小姓達も一緒だ。そしてそのうえで若者に対して言うのであった。

「王が城に戻られる」

「城に？」

「そう、城に」

戻るといのである。

「日も高く昇った」

「日も」

「御前を連れて行くところがある」

「それは何処なんだ？」

「聖餐の席だ」

そこにだというのだ。

「御前にその食べ物や飲み物を恵んで下さるだろう」

「聖杯？さつきも話に出たが」

「それは言うことはできない」

このことは答えようとしないう若者だった。

「それはだ」

「答えない」

「そう、答えない」

また言う彼だった。

「しかしだ」

「しかし？」

「御前の身が聖杯に仕えるように選ばれているのなら」

「その場合は？」

「聖杯も御前の傍を離れない」

「そうなのか」

それを聞いてもであつた。若者には実感の沸かないことであつた。

第一幕その十一

「それが僕に」

「わしは御前がわかったような気がする」

彼を見ながらの言葉だった。

「聖杯に通じる道はだ」

「その道は？」

「国中にただ一筋もなく」

こう若者に話すのだった。

「聖杯自ら導き寄せようとしない限りはだ」

「そうしない限りは」

「誰も近付くことはできない」

そうだというのだ。

「誰一人としてだ」

「僕は碌に歩いていないのに」

これは主観だった。

「もう遠くに來た気がする」

「それがわかるのか」

「何となく」

「ここではだ。行くぞ」

「うん」

グルネマンツは若者に共に行くように促す。彼もそれに応え二人で進む。そのうえで歩いていくとだった。舞台は徐々にではあるが森が消えて岸壁の間に門が開けてきた。その門内に入り白い美しい宮殿の中に入っていた。

そしてその宮殿の中は壮麗で上から白い光が入ってきている。白い光は白い壁と立ち並ぶ円柱、それに銀色に輝く床に白い宮殿を歩いている。そのうえでさらに中に入ってきていた。

そうしてだ。その中を進みながらさらに話すグルネマンツであつ

た。

「ここではだ」

「ここでは？」

「時間が空間に変わるのだ」

こう彼に話すのだった。

「ここではだ」

「そうなのか」

「わしに見せてもらいたい」

また若者に告げた。

「それをだ」

「僕が何を見せるんだ？」

「御前が愚か者で純粹ならばだ」

若しそうであればというのだ。

「どんなものが御前に授けられているのかをだ」

「僕が見せる？」

「そうだ。それをだ」

こう話すのだ。

「それを」

「そうだ、それをだ」

また彼に話した。

「いいな」

「僕には何もわからない」

実際に彼はわかつていなかった。何もだ。

「それでもなのか」

「そうだ、それでもだ」

まだ若者に言うのであった。

「来るのだ」

「ここに」

「そう、今来た」

歩ければそれだけで辿り着いたのだった。そこは柱が連なる広間

やはり白い光に白と銀の世界が映し出されている。天井はアーチになっている。その左右の扉が開かれると騎士達が来た。そうしてそれぞれ集って言うのであった。

「今こそはじめよう」

「朝の儀式を」

「それを」

こう言つてであつた。それぞれ集まっていた。

そこに今にも倒れそうな老騎士が来た。他の騎士のそれと比べて雰囲気は違っていた。グルネマンツと同じく白い髭を生やしている。その彼がその騎士の中央に横たえられその上体を起こしている王に言つてきた。

「我が子アムフォルタスよ」

「父上ですか」

「そうだ。そなたの務めを果たしているか」

こう彼に問うのであった。

「それはだ。どうなのだ？」

「それは」

「わしは今日も聖杯を仰ぎ生きながらえることができるのか」
こう言うのであった。

「それとも主に導かれることなく去ることになるのか」

「しかし私は」

だがここで王は項垂れて父王に言葉を返した。

「父上、どうかもう一度」

「どうしたというのだ？」

「この務めを果たしてくれぬでしょうか」

これが彼の言葉だった。

「どうか私に代わつて」

「それは何故だ？」

「私はもう生きることを望んではいません」

顔を俯けさせての言葉だった。

「ですから」

「それはできません」

しかし王の返事は悲しいものだった。

第一幕その十二

「わしもまた歳を取り過ぎた」

「だからだということですか」

「そうだ。そなたしかいない」

こう言つて王に返した。

「そなたが奉仕して己の罪を購うのだ」

「その罪をですか」

「そうだ。だからこそ聖杯を」

「わかりました」

「それでは」

先王の言葉を聞いてそのうえで小姓達が動こうとする。しかしであつた。

「待て」

「待て？」

「開けないのですか」

「そうだ」

その通りだと小姓達に言つたのは王だつた。

「この世に誰一人として我が苦しみをわかつてくれる者はいない」

「だからだと」

「そう仰るのですか」

「この苦しみはそなた達を喜ばせる聖杯によるもの」

こう言つて開けさせようとしなひ。

「呪いを受けてその務めを果たすべき身の苦しみ」

「ですが」

「それでもです」

「我々は」

「許してくれ」

だが王はそれをあくまで拒むのだった。

「この苦悩に比べればどれだけの傷も痛みも何程のことがあるう」
「だからなのですか」

「それは」

「許してくれ」

また言う王だった。

「今更逃れようもなく父上から受け継いだこの悲痛な役目」

「悲痛なですか」

「王であることが」

「そのことが」

「あらゆる人々の中で無類の罪深い身であり」

それが己だというのだ。

「至高の宝である聖杯に奉仕し」

「ですが王」

「それでもそれは」

「わかっていてもだ」

それでもだというのである。

「純粹な者達に向かい聖杯の祝福が舞い降りるように祈らなくては
ならない」

「それが王の務めです」

「ですが。なのですね」

「それでも」

「王は」

「辛いのだ」

嘆き悲しみ、そのものの言葉だった。

「恵み深い神よ、私の罪への報いなのですね」

天を見上げての言葉だ。

「神の御許へ」

「そこへ」

「行かれないと」

「そしてなのですか」

「そのうえで」

騎士や小姓達の言葉も続く。

「今はですか」

「もう」

「神が清められたその御言葉を恐れ深く願う」

これが彼の言葉だ。

「魂の奥底から救いを仰ぐ懺悔を続け」

「そうして聖杯は」

「今は」

「一筋の光が神聖な器の上にさして」

王の言葉がさらに出される。

「被いも取れることになろう」

言いながらだった。その前にある聖杯を収めた銀の箱を見るのだ
った。

そのうえでだ。彼はさらに言うのであった。

「そうすると」

「そうすると」

「一体？」

「聖杯に宿る神意が凜然と力強く灼熱するのだ」

王は憂いの中でさらに続ける。

「幸豊かな享受の苦痛におののきこの上なく神聖な血の気が」

「ですが王よ」

「それは」

「わしの心臓の中に流れ込んで来る思いは」

さらに言っていく。

第一幕その十三

「罪深い血は逆流し酷く恐れ怯えてだ。罪深い欲求の世界の中へ」
「死に」

「それを」

「この逆流の血はせき止める門をもあらたに超えては流れ込もうとする」

そしてさらに話していく。

「この傷からあふれ出るものは他ならないあの槍で主が傷付けられた場所にある」

「あの主とですね」

「確かにそうです」

「それは」

「私はわかる。あの地で主が聖槍で傷を受けられた時に血の涙を流し苦悩の神聖な憧れのうちに人の汚れた罪を悲しまれたことを」

今それがわかると。話すことができた。

「この聖なる地で私は罪深い血を流し至尊の宝を管理し救世のバルザムの保護者である」

話が続く。

「私の罪深い血は憧れの泉の中から絶えず流れ出るのに如何なる贖罪もそれを鎮めてはくれぬ」

その話はまさに嘆きそのものであった。

「慈悲深い神よ、その慈悲を。我が継承の務めに免じてこの傷口を塞ぎ聖なる死を与え御身の為純潔な身として蘇らえらせ給え」

共に悩みて悟りゆく」

「純粹無垢の愚か者」

騎士と小姓達はさらに話していく。

「かかる男を待てと」

「我の選べる男よ」

「ですから王よ」

「そうです」

彼等はその王を円形に取り囲んでいる。そのうえで告げてきていた。

「ですからお心を安んじられ」

「今日はお勤めを」

「わかった」

それには止むを得ないといった顔で頷く王だった。

そうしてだ。彼はさらに言うのであった。

「開くがいい」

「はい、それでは」

「そのまま」

その箱が開かれそのうえでそこから見事なまでに白銀に輝くその杯が姿を現わした。それはすぐに王の前に差し出されたのだった。

王はそれもまずは頭を下げ黙祷を捧げてから広間全体にその杯を見せようとする。その杯を手にとってそれを周囲に見回させるのだった。

「我が肉を取れ」

「我が血を受けよ」

「我等の愛に」

「我を偲ばん為に」

こう話していく騎士と少年達であった。あの主の言葉だった。

聖杯から目も眩む様な紫紅色の光を放ち広間の中を柔らかく照らす。騎士達も小姓達もその光を受けて恍惚となる。先王もそれを浴びて言う。

「この聖なる喜び。主は今日何と素晴しく我等に伝えてくれるのか」

「はい、確かに」

「今は」

他の者達もその光の中で話していく。

「この喜びは他の何にも」

「代えられません」

「どのようなものも」

「何があるうとも」

やがてそれが収められ広間は元の白い光に包まれたものになった。
小姓達がその中でも言うのであった。

「最後の聖餐の葡萄酒とパンを」

「かつて主は共脳の愛の力を通じて」

「自ら流される血に変えられ」

「自ら捧げる血に変えられた」

その最後の晩餐のことであつた。

「今日汝等を元氣付ける為」

「幸深き慰めの愛の精霊は」

今度は若い騎士達が言う。

「聖なる恵みの血と肉を」

「汝等に注がれたる葡萄酒に変え」

「今汝等の取るパンに変えられる」

「パンを取れ」

この言葉が騎士達から出された。

第一幕その十四

「昂然としてそのパンを」

「肉の力と強さに変えよ」

「死に至るまで誠実に」

「如何なる労苦にも揺らぐことなく」

「救世主の技を実現せよ」

「今こそ」

そして今度は。

「葡萄酒を取れ」

「新たにその葡萄酒を」

血であつた。

「命の燃える」

「血に変えよ」

「協力を喜び」

「兄弟の誠実さを保ち」

「幸深き勇気を奮い」

「そして戦うのだ」

こう述べられていつてであつた。

「信仰に幸あれ」

「愛と信仰に幸あれ」

「愛に幸あれ」

「信仰に幸あれ」

騎士達の言葉が続く。そのうえで肅然と広間を後にする。王は暫くそこにいた。だがその顔は次第に俯いていき倒れるようになった。小姓達が王を氣遣つて集まるがその脇から赤いものが滲み出ていた。王はそのまま連れて行かれる。そして若者とグルネマンツだけになった。だが若者は胸に手を当てて王を同情する顔で見ているだけであつた。

グルネマンツは彼の傍に寄りだ。難しい顔で問うのだった。

「何かわかったか？」

「何かって？」

「今見たものがわかったか？」

こう問うのだった。

「御前が今見たものがだ」

「一体何を」

戸惑った顔での返答だった。

「僕が何を」

「そうか。やはり御前は只の愚か者か」

グルネマンツはそこまで聞いて残念そのものの声で述べた。

「所詮は」

「僕は一体」

「行くがいい」

その諦めた声での言葉だった。

「好きな場所に行くがいい」

「ここを去る」

「その前にパンと葡萄酒位はやろう」

これは彼の気遣いであった。

「しかしだ。腹の中に入れたならばだ」

「ここを去る」

「そうだ。その時には何も傷つけるな」

先程の白鳥の話である。

「わかったな」

「うん、じゃあ」

「共に悩みて悟りゆく」

「純粹無垢の愚か者」

またこのことが言われた。

「信仰に幸あれ」

「愛に幸あれ」

若者はその言葉の中を去っていく。今聖者はいなかった。

第二幕その一

第二幕 目覚め

魔法の城は淫靡な趣さえあった。

色は暗灰色だがその中に紅い花が咲き誇り紅や緑の透き通る服を着たニンフの如き娘達が艶やかに舞っている。騎士達がその中で墮落した顔をしている。城の主クリングゾルはアラビアの服を着て黒く濃い髭を生やした大柄な男であった。彼は己の玉座に座したままで周りに控える騎士や美女達に言うのだった。

どの者達も目は虚ろだ。その虚ろな目で彼の言葉を聞いていた。

「時が来た」

「はい、時が」

「今こそ」

「そうだ。来たのだ」

こう周りに語るその声は重厚だが妙な高さがある。それこそが彼の声だった。

「この城はあの愚か者を引き寄せたのだ」

「愚か者といえますと」

「またモンサルヴァートの騎士が一人」

「違う」

ところがであった。ここで彼は言うのだった。

「あの者達とはまた違う」

「といいますと」

「それは」

「子供の如き歓声をあげこの城に近付いて来る」

まさに遠くを見る目であった。

「そしてクンドリーだが」

「あの女ですか」

「今は俺の魔法で眠らせている」

そうしているというのだ。

「だがすぐに起き上がらせられる。その時こそだ」

ここで右手を前に出して掲げてみせた。するとであった。それだけで何かが起こったのだった。

「出るのだ」

彼は言った。

「そしてここまで来るのだ」

「あの女が」

「ここに」

「そうだ。来るのだ」

こう言うのである。

「名無しの御前を主が呼んでいる」

そしてさらに告げるものは。

「御前はかつてヘローディアスといいかつてはグンドリュッギア、そして今はクンドリーといったな」

そうした名前を出していくのであった。

「御主人様が御呼びだ。出て来るのだ」

そう呼ぶとであった。今遂に来たのであった。

クンドリーは部屋の中に屋気楼の如く現れた。そのうえで言うのであった。

「私を呼んだのか」

「そうだ」

まさにそうだと答えるクリングゾルだった。

「俺が御前を呼んだのは」

「それは何故」

「理由は一つしかない」

こう返しもした。

「御前が俺の奴隷だからだ」

「私はそうなった覚えはない」

「またあの城に行っていたのか」

ここで忌まわしげな顔になるクリングゾルだった。

「モンサルヴァートに」

「あの城が私の本来の居場所」

「あの場所が何だというのだ」

声もまた忌まわしげなものだった。

「あの様な白がだ」

「あの城にやがて現れる」

クンドリーは空虚な声で彼に返す。

「私をこの永遠の苦しみから解き放ってくれる清らかな愚か者」

「またそいつなのか」

「彼を求めて」

だからだというのである。

「私は」

「あの城の者達は何も知らない」

クリングゾルの今の言葉には嫉妬もあった。

第二幕その二

「その様な者達は何だというのだ。」

「私の呪い。憧れ」

「あの城の無知な騎士達に憧れるのか」

「私は何時か救われる」

ここでは話が噛み合っていないかった。しかしそれでもお互いに話すのであった。

「だからこそ」

「好きにしる。それではだ」

「それでは」

「あの者達は御前に何の見返りも出さない」

「そもそもそうした発想が彼等にはなかった。」

「だが俺は違う」

「違う」

「そうだ、違う」

まさにそうだというのである。

「俺は違う。御前に褒美をちゃんとやる」

「そんなものはいらない」

「御前はかつて俺に槍を授けてくれた」

「このことを笑いながら話すのだった。」

「それに見返りをやったな。多くの黄金を」

「私にとって黄金は何の意味もないもの」

「黄金はこの世を動かすものだ」

「だが彼はこう言うのだった。」

「それは覚えておけ」

「そして今度は何を」

「また言う」

今はあえて言わないのだった。

「それではだ」

「その時は」

「動かしてやる」

これが彼の言葉であった。

「わかったな」

「私はもうそれは」

「御前は以前聖者になろうとした」

クリングゾルはその時のことも話した。

「だがそれはどうなった」

「それは」

「御前は恐ろしく苦しい立場の中にある」

今度はこんなことも言うのだった。

「抑えきれない憧れの苦しみや凄まじい衝動の地獄の欲望や」

「それは」

「そういったものの中にある」

それが彼女だというのである。

「御前はその中に必死に抑え込んでいるがだ」

「私はそれでも」

「嘲笑や軽蔑は御前はかなり受けてきたな」

「・・・・・・」

「沈黙が何よりの証だ」

クンドリーが黙ったのを見てさらに言ってみせたのである。

「嘲笑や軽蔑はあの男が受けた。あの王がだ」

「あの王が」

「頭の高いあの男から槍を奪った。奴等はやがてそのまま朽ちる」

モンサルヴァートで何が起きているのかはもうわかっていたのだ。

「そしてやがて聖杯も俺のものとなるのだ」

「私はもう疲れた」

クンドリーの声が相変わらず虚ろなものであった。

「誰もが弱い。そして私も」

「弱ければどうだというのだ？」

「疲れて動けなくなってしまうて」

その虚ろな言葉を続けていく。

「眠ってしまいたい。それが永遠の救いになれば」

「御前に抵抗できる者ならばそれもできよう」

クリングゾルは嘲りを込めて彼女に告げた。

「しかしだ」

「しかし」

「今ここに来る若造でそれを試してみるか」

「あの若者とは」

「見ている筈だ、あの忌々しい場所で」

モンサルヴァートの森のことすら話に出そうとしない。

「御前もまた」

「あの若者が。何も知らない若者が」

「来たな」

クリングゾルは玉座にしながら全てを見ていた。

「遂にか。来たな」

「来た、遂に」

「そうだ、来たのだ」

それを見ながらクンドリーに語ってみせる。

「あの若造が」

「私は今度为一体」

「よし、それではだ」

クリングゾルは早速動いた。

第二幕その三

周りの騎士達を見回してだ。そのうえで告げたのだ。

「いいな」

「はい」

「わかりました」

彼等は黒い鎧に灰色のマントであった。外見はモンサルヴァートの騎士達と完全に正反対であった。その彼等がクリングゾルの言葉に応えたのだ。

「それでは」

「今からその若者を」

そして告げる言葉は。

「倒すのだ。いいな」

「はい、それでは」

「今より」

こうして彼等は出陣した。そのうえで城門にいる若者に剣を抜いて向かうのだった。

若者は何故自分が今この城の前にいるのかわからなかった。それでまずは呆然としていた。

「どうしてここに？」

「待て、その若者よ」

「何の用だ」

まずは門番の騎士達が彼に問う。

「何故ここに来た」

「言うのだ」

「僕はただここに来た」

こうその暗灰色の壁の前で言うのだった。

「ただそれだけだ」

「それだけだというのか」

「貴様は」

「そう」

こう臍に答えた。

「それだけだ」

「では聞こう」

「この城に入るつもりか」

「入らなければならない気がする」

これも自分ではわかっていなかった。しかしこう言うのであった。

「何があるうとも」

「そうか、それではだ」

「我等はここを通さん」

「クリングゾル様のこの楽園は」

「楽園。そうなのか」

若者はそれを聞いてもやはりわかっていない返答であった。

「ここが」

「入るのか」

「それではだ」

騎士達は彼に剣を向ける。しかし若者もまた剣を抜きだ。彼等を瞬く間に退けてしまったのであった。

「何っ、この男」

「強い!？」

「しかもかなり」

攻撃を受けてからの言葉だった。

「これは何があってもだ」

「通すわけにはいかない」

「待て」

「そこにいたのかっ」

ここで城の中から他の騎士達も現われた。そうしてだった。

それぞれ剣を抜いて若者に襲い掛かる。だが若者はあまりにも強く彼等は退けられるばかりだ。気付けば騎士達は全て傷を負ってし

まっていた。

「くっ、何という」

「これは」

「中に入れば」

ここでまた言う若者だった。騎士達は城の中に退いていく。

彼はそれを追うように城の中に入った。するとそこは様々な熱帯植物が豊かにあり紅や緑の花々が極彩色の世界を作っている。そうした場所だった。

アラビアのそれを思わせる城であった。その城の中で。彼は果然とその城の中を見回していた。するとその不思議な園に出て来たのは。

「門から誰か来たわ」

「やけに騒がしかったけれど」

「私のいという人達を傷つけたのは」

「貴方だというのね」

その紅や緑の透き通る服の女達が出て来たのであった。そのうえで彼の周りに集まってきて言うのであった。

「貴方が私達のいという人を傷つけた」

「その貴方は一体」

「誰だというの？」

「僕は」

若者は彼女達にも要領を得ない返答で返したのだった。

第二幕その四

「何なのだ」

「貴方自分がわからないの？」

「若しかして」

「僕は何だ」

やはりこうした返答であつた。

「何だというのだ？」

「呆れた。自分で自分がわからないなんて」

「馬鹿じゃないかしら」

「全く」

女達はその彼を取り囲みながらそれぞれ呆れた顔で言った。

「自分のことは自分が一番わかっているのではなくて？」

「それでわからないなんて」

「筋が通らないわよ」

「僕は」

また言う彼であつた。

「何なのだ？」

「何なのかじゃなくて」

「貴方は何なの？」

「私達にとって」

「何なのとはどういうことなんだ？」

若者には全くわからない話だつた。

「それは」

「貴方わからないの？」

「そういうことが」

「何もかも」

「わからない」

実際に何もわからなかつた。

「僕には何も」

「駄目だわ、これでは」

「そうね。この人何もわからない」

「愚か者ね」

「完全にね」

「僕は愚か者」

そう言われてあることを思い出したのだった。

「あの城でも言われた」

「ねえ貴方」

「そもそも誰なの？」

「一体誰なの？」

「わからない」

ここでも同じ返答だった。

「僕は誰なんだ」

「よくこんな人がこの中に入ってこられたわね」

「幾ら何でも何もわからない人が」

「全く」

女達もこう言うしかなかった。

「そもそも誰なのか」

「それさえもわからない」

「それにしても」

しかしここで彼はふと言った。

「はじめてだ」

「はじめてって？」

「何が？」

「どういうことなの？」

「こんなことははじめてだ」

こう言うのである。

「こんな奇麗な連中を見たことは」

「私達みたいね」

「そうね」

「それはわかるわ」

彼等もわかることではあった。

「まあ私達はね」

「こうしてクリングゾル様にお仕えして」

「楽しむのが仕事だからね」

「そうよね」

「それでだけれど」

ここで女達は若者に対して問うた。

「貴方は別に私達をやっつけに来たのじゃないのね」

「それは違うのね」

「そうなのね」

「僕はもう勝手に何かを斬ったり射たりはしない」

グルネマンツの言葉を愚直に聞いていることなのだ。

「それはもう」

「それならいいけれど」

「それなら一体」

「何をするの？」

「僕は君達にとって何なんだ？」

これはわからなくて当然だった。

第二幕その五

「一体」

「だからこちらが聞きたいけれど」

「そうよ。何なの？」

「貴方は誰なの？」

「わからない」

「また同じ返答だった」

「僕は誰なんだ」

「何もわからないのね、相変わらず」

「けれどこの子って」

「そうよね」

「ここで彼女達も気付いたのであった。

「顔は奇麗で」

「背も高いし身体もしっかりしてるし」

「いい顔してるわよね」

「そうよね」

「好みよ」

こう言ってまた近付く彼女達だった。そうしてだった。

「ねえ」

「いいかしら」

「ちよつとね」

「ちよつとって？」

若者は戸惑いながら女達に応えたのだった。

「何かあるっていうの？」

「何かがあるから尋ねるのよ」

「いいかしら、それで」

「こっちに来て」

「遊びましょう」

「遊ぶ」

そう言われてもであつた。きよんとするだけの彼であつた。そのうえでだ。また呆けた顔になつて彼女達に問うのであつた。

「遊ぶつて何を」

「遊ぶことも知らないの？」

「まさかそうしたことか」

「何一つとして」

「香りがする」

若者にもこれはわかつた。

「君達からもいい香りがする。これは」

「そうよ。私達の香りよ」

「それなのよ」

「それはわかるのね」

「わかる」

それはだと返すのであつた。

「けれど僕は」

「まあそれならいいわ」

「わかつたのならね」

「さて」

それを聞いてまた話す女達であつた。若者の周りで賑やかに踊つてさえている。そうしながらさらに話をしていくのであつた。

「いいかしら」

「遊ぶことを知らないのなら教えてあげるわ」

「私達がね」

「教える」

その言葉もわからなかつた。

「何を教えてくれるんだ、いや」

「いや？」

「何なの？」

「教えるつて何なんだ？」

それもわからないのであった。

「何を教われればいいんだ、僕は」

「だからね。それはね」

「つまりはね」

「聞いて覚えることなのよ」

「感じ取ってもね」

「聞いて覚えて」

言葉をそのまま反芻する。

「そして感じ取る」

「そういうことよ」

「わかったかしら」

「わかってないみたいだけれど」

「わかった」

一応はこう答えた若者だった。

「それじゃあ」

「ええ、それじゃあ」

「いいわね」

「遊びを教えてあげるから」

「君達は花なのか？」

若者はここでも感じ取ったままで答えた。

第二幕その六

「まさか」

「そうよ、お花よ」

「私達は花の化身なのよ」

「花の乙女なのよ」

まさにそうだと答える彼女達だった。

「わかつてくれたわね」

「それじゃあだけれど」

「いいかしら」

「やつと遊べるわね」

「待ちなさい」

しかしであった。ここで声がしたのだった。

「パルジファルよ」

「パルジファル」

若者はその声が出した言葉に反応した。

「確かその名前は」

「そう、覚えている筈」

「お母さんが呼んでいた」

このことを思い出したのである。

「夢の中で」

「ここに留まるのよ」

「ここに」

「そう、御前は今は」

こう言つてであつた。クンドリーは髪をとかし整え化粧をし紅の薄い見事な服を着てだ。頭に顔を出してヴェールをしてだ。若者の前に出て来たのだ。

「ここに留まるべきなのよ」

「それは何故」

「すぐにわかるわ」

こう言ってであった。周囲に顔を向けそうして言うのであった。

「御前達は」

「私達は？」

「それは？」

「離れるのよ」

そうしろというのだ。

「いいわね」

「離れる？」

「けれど」

「今は」

「離れるのよ」

そうしろというのである。

「わかったわね」

「仕方ないわね」

「貴女には逆らえない」

「だから」

誰もクンドリーには逆らえなかった。それは彼女の魔力故であった。

そしてであった。彼女達は去り二人だけになった。若者はあらためてクンドリーに対して問うのだった。

「名前をない僕を呼んだのは御前なのか」

「そうよ。私が呼んだのは」

「呼んだのは？」

「清らかな愚か者」

それだというのだ。

「それがパルジファル」

「パルジファル……」

「御前の父ガムレットがアラビアで死んだその時」

これも若者の知らないことだった。

「御前の母は御前にこう名付けたのだ」

「名付けた」

「そうよ。まだ自分の中にいる御前にね
そうしたというのである。」

「私はそれを教える為にここに来た」

「この城に」

「呼ばれたが御前に会う為に今この城に来たのよ」
こう若者に語る。

「僕の為に」

「私の国は気が遠くなる程遠い場所にある」

「それは時間なのか？」

モンサルヴァートに入った時のグルネマンツの言葉を思い出して
であった。

「時間でなのか？」

「時間でも空間でもよ」

両方だというのだ。

第二幕その七

「どちらも。そして私は」

「御前は？」

「多くのものを見てきたわ」

「今度はこう話すのだった。」

「まだ子供の御前が母の胸にすがっているところも」

「母さんが」

「そして」

クンドリーの言葉は続く。

「ものを言いはじめた時もね」

「そんなことは全く覚えていない」

「あんたが覚えていなくとも私が覚えている」

「そうなのか」

「そう。心の悩みを持ちながらも」

これは若者の知らないことだった。だがクンドリーはそれをあえて言ってみせてそのうえで話したのである。それも彼女の考えの中であつた。

「ヘルツェライデも自然と笑顔になったもの」

「そうだったのか」

「御前はお前の母の楽しみで」

若者にさらに話していく。

「彼女が苦しい時も御前は楽しく笑い彼女はそれを見て笑い」

「それでどうなったんだ？」

「彼女はその御前を優しく撫でて寝かせていた」

「母さんが」

「御前を目覚めさせたのは母の熱い涙の露だった」

「涙？」

「そう、涙よ」

それも話すのだった。若者の知らないことだと知りながらもだった。

「御前の父を失った悲しみと御前への愛で」

「父さんと僕の」

「御前には父親と同じ悲しみをして欲しくなかった」

「だからなのか」

「武器を遠ざけ戦いから引き離し」

これがその母のしたことであつたのだ。

「世間から引き離してそうして育てていた」

「父さんの様に死ぬことがないように」

「夕方遅くまで帰って来ない時も心配で泣き御前が帰って来て微笑み」

まさにそうしたというのである。

「そして御前がいなくなった時」

「ここまで聞くその時に」

「そう、その時に」

まさにその時だというのだ。

「母が嘆き悲しんだ声や心を傷めた叫び声は聞かなかったのね」

「知らなかった」

「彼女は昼も夜も待ち遂には」

「遂には？」

「深い悲しみは心を悩まさせて」

「そして？」

「その中で死んだのよ」

そこまで聞いてであつた。若者は今ある感情を感じた。その感情は。

「悲しい……」

「悲しいというのね」

「悲しい……」

項垂れた顔での言葉だった。

「僕はその時何をしていた」

「あの城に向かっていた」

「そして懐かしく優しい母さんを死なせた」

こう言ってその場に崩れ落ちてしまった。

「僕が」

「しかしそれは」

「僕はふらふらとして自分の母親を死なせてしまった。大切な母さんを」

「その苦痛の思いをまだ知らなかったその時は」

クンドリーはこう彼に話した。

「優しい慰めはなかった」

「なかった・・・」

「しかし御前は今悲しみを知った」

まずはその感情だというのだ。

「そして」

「そして？」

「後悔をしている筈」

「今この悲しみと共に僕を苦しめているものが」

「そう、それが後悔」

まさにそれだというのだ。

「悲しみや苦しみの思いは」

「その思いは？」

「愛が御前に捧げてくれる慰めで」

この言葉を出すのであった。

第二幕その八

「償えばそれでいい」

「けれど僕は」

若者は崩れ落ちたまま言った。

「何故母さんを忘れたんだ」

「御前の母をか」

「そう。何故忘れたんだ」

このことを嘆き悲しんでの言葉だった。

「何故なんだ、そして今思い出した」

「立つのよ」

クンドリーはその若者にまた告げた。

「立てばいいわ」

「立つ」

「そう、まずは立つ」

そうしろというのである。

「御前は今何を感じているのかしら」

「ぼんやりとした愚かさか」

まずはこう答える若者だった。

「僕の中にあることを」

「それをなのね」

「それが」

「懺悔をすれば罪は後悔となって消える」

母が今言うのはこのことだった。

「悟りが開ければ愚かさも分別に変わる」

「分別……」

「愛というものを知るといい」

それをだというのだ。

「愛を」

「そう、愛を」

何時の前にか彼の前に来ていた。

「御前の母の愛が御前の父に注がれたその時に」

「その時に？」

「御前が生まれた」

その時にだというのだ。

「御前にその身体や命を授けてくれたのも愛であり」

「愛が」

「そう、それが」

まさにそれがだというのだ。

「愛に出会えば死も愚かさも逃げ出すより他はない」

「愛が」

「その愛が今日御前に捧げるものが」

それを捧げようというのだ。

「御前の母の祝福の最後の挨拶としてのおの愛の最初の口付けなのだから」

こう言ってそれで彼に顔を近付けてだ。そうして彼の唇に己の唇を押し付けた。そのうえで接吻をしたのであった。

長い接吻であつた。それが終わったその時だった。若者は何もかもが変わつたのであつた。

そしてだ。表情を一変させてだ。彼は言った。

「パルジファル……」

「名前を知つたのね」

「これが私の名前だな」

まさにそれだというのだ。

「私の名前だ」

「そして他には」

クンドリーは彼、パルジファルにさらに問うた。

「あるというの？」

「アムフォルタス王」

王の名前がだ。自然に彼の口から出たのだ。

「あの傷が私の心の中で燃えている。あの嘆き声が私の中で響いている」

「それを感じているのね」

「救われるべき人だ」

それが王なのだという。

「あの傷口から血が流れ出るのを私は見た」

「それを」

「それは傷口ではない。傷口なら流れ出る」

パルジファルが話す。

「心の中が火の様に燃え上がる」

「心で感じているのね」

「憧れ、私の五官全てを捉えて強いる憧れ。愛の苦しみ」

それを捉えての言葉だった。己の中でだ。

「私の身体が震えて慄く。罪深い欲望のうちに
そして言うのであった。

「眼差しが救いの聖杯を求める」

「するとどうなるの？」

「神々しくも和やかな救済の喜びを感じる」

「それをだというのね」

「そう、感じる」

まさにそれをだというのだ。

第二幕その九

「感じ取りだ。神聖な血が燃えることも。全ての人々の心を震えさせる」

「心を」

「そう、これを」

そう話してであつた。

「胸の中だけに消える気配がない。主の嘆きが」

「私はあの時に」

「その嘆きだ」

クンドリーが何を言いたいのかもわかつていたのである。

「その嘆きこそがだ」

「わかっているというのね」

「汚された槍の嘆きもまた」

それもだというのだ。

「罪に汚れたる手より我を救え」

「それが槍の声」

「わかっている。その嘆きは恐ろしいまでに強い」

今の彼には全てがわかっているのだった。

「私の心にまで呼び掛けてくる。しかし私はそれに気付かなかった」

「今気付いた」

「主よ、慈愛の父よ」

こう話していくのであつた。

「罪深い私はどうしたらこの罪が償えるのでしょうか」

「私を」

「御前を？」

「もうこのまま去りたい」

クンドリーは彼の前に来て話すのだった。

「救われたい。神の御力で」

「まだだ」

しかしであった。パルジファルは彼女のその言葉を拒むのだった。そのうえでだ。彼はクンドリーに告げた。

「御前は罪を犯した」

「罪を」

「そう、その罪によつてだ」

こうクンドリーに話すのだった。

「御前は王を惑わしたな」

「それも知っている」

「全てがわかつてきたのだ」

そうだというのである。

「その唇も首筋も使つて王を惑わしたな」

「しかしそれは」

「全てを使い王を今の苦しみに誘つたのだつたな」

クンドリーを厳しい目で見据えながらの言葉だった。

「それも知つたのだ」

「御前が心の中で王の苦しみを感じ取つた」

「それは事実だ」

「ならば私の苦しみも」

切実な顔でこう告げるのだった。

「私を救う為に」

「せよというのか」

「そう、私はかつて主を待った」

「そうだったな」

「しかし彼が丘に向かうその時に」

遙かな過去の話であった。

「私は彼を罵った。私への救いはまだだと告げた彼を」

「そして呪いを受けたのだつたな」

「死のうと生き続けようと寝ても覚めても私を責め苛む」

まさにそうだというのだ。

「私は未来永劫続くこの苦しみの中であの主を見た。私を救おうと
いうその主を」

「見たのだな」

「そして私に笑顔を向けてくれた」

それはあつたというのだ。

「しかし」

「しかし？」

「その度に私を拒みそのうえで私は目覚める」

そうしてだというのだ。

「私は二つの世界の中を彷徨い笑い叫び怒る」

「泣けはしないな」

「泣くことは許されない」

全てを彼に対して話すのだった。

「暴れたり狂ったりしながら暗い夜に包まれ続け」

「そうして生きてきたな」

「悔い改めて逃れることもできなかった」

その時からだというのだ。

「私が焦がれ死にたいまでに憧れたあの主、愚かにも嘲ったあの主」

「あの方は全てを知っておられた」

「あの主の下に。これからは」

「まだだ」

しかしここでまたこのことを告げるパルジファルだった。

第二幕その十

「私の使命には御前を救うこともある」

「それなら」

「だがまだだ」

こう言つて今は拒むのだった。

「それは御前がその憧れから顔を背けたその時にだ」

「その時にというのね」

「御前の悩みを癒す慰めをもたらすのはその悩みが湧き出る泉ではない」

「では何だというの？」

「まずはその泉が閉ざされてだ」

それからだというのだ。

「御前はそれからでないと救われはしない」

「救われない……」

「人々が嘆き悲しみながら思いを焦がしている泉は別なのだ」

「別だというの？」

「そう、別だ」

まさしくそうだというのだ。

「多くの者がいる」

「多くの者。まさか」

「私には行かなければならない多くの世界があるのだ」

「私が見てきた世界以外にも」

「時間も空間も超えて」

そうしたものを全てだというのだ。

「全ての愛に救いをだ」

「まさか遠く東の果ての国にも」

「行く。新しい国にも古の国の都にもだ」

彼はこの地にありながらそうしたものも見ているのだった。

「階級により引き裂かれる愛も立場によって別れなければならないようになろうとしている愛もだ」

「そうした全ての愛を」

「私はこれから見て救いに行くのだ」

そうするというのだ。

「全ての世界を巡る。それではだ」

「それでは」

「誰がその泉の本質をはつきりと明らかに知っているのか」

それも言うのだ。

「御前は唯一の救いの真の泉の本質を知っている筈だ」

「では」

「あらゆる救いをその手から逃し世界の妄念の闇に包まれつつ最高の救いを熱烈に願う」

それが誰かというのだ。

「永劫の罪の泉にばかり思いを焦がしているな」

「それが私だと」

「御前が救われるのはだ」

その時が何時かも話される。

「最後の時だ」

「けれどそれでも」

「まだだ」

今それをしようとはしないのだった。

「それは変えられない」

「私が笑ったことで報いを与えてくれたあの人」

そのことも話すのだった。

「あの呪いが今も私を責め苛むというのに」

「それも運命なのだ」

こう言ってそれを拒み続けるパルジファルだった。

「御前のだ」

「ではこのまま」

「待つのだ。御前の時は必ず来る」

こう最後に言った。そしてだった。

城壁の上にクリングゾルが姿を現わしてきた。その手にはあの槍がある。

その槍をパルジファルに突きつけながらだ。彼に対して告げるのだった。

「そこを動くな」

「クリングゾルか」

「そうだ。貴様を倒す者だ」

怒りの目で彼を見下ろしての言葉であった。

「この槍でだ。受けるがいい！」

「むっ！」

槍が放たれパルジファルに投げられる。しかしであった。

パルジファルがその槍を見据えるとであった。何と槍は彼の目の前で止まったのだった。空中でぴたりと制止した。

「何っ!？」

「この槍は私のものだ」

驚くクリングゾルをよそに彼に告げて槍を手にとった。

そうしてだ。その槍を右手に持ち。

「この槍にはあらゆるまやかしを消すことができる」

「俺の妖術を崩すというのか!？」

「貴様自身もだ。見ろ！」

その槍で十字を切った。するとだった。

クリングゾルも城のありとあらゆるものも消え去った。そして後に残ったのは廃墟だけだった。城壁も城も庭も全てが廃墟となった。騎士達もモンサルヴァートに戻る。女達は花に戻った

今彼はクンドリーに背を向けていた。しかし彼はその彼女に顔を向けてだ。

「わかっていよう」

「それは」

「何処で私に出会えるのかを」
こう言って廃墟を後にするのだった。今彼は旅立っただった。

第三幕その一

第三幕 聖杯の奇蹟

グルネマンツはあの森にいた。今は城を離れ半ば隠者となっていた。彼は簡素な小屋を後ろに今は隠者の服を着てそのうえで静かに森の中の切り株の上に腰掛けている。今は朝である。

その朝にだ。彼は声を聞いたのであった。

「獣か。違うな」

それはすぐにわかったのだった。

「この森の獣はあれだけ悲しい嘆き声を出さない。では一体。それに」

声が次第に近付いてくるのがわかった。

「聞き覚えがあるな。あれは」

そして来たのだった。クンドリーだった。またあの粗野な姿でふらふらとグルネマンツのところに来てだ。そのうえで言ってきたのである。

「戻って来たのだな」

「ようやくここに」

「長い間見ていなかったが」

「そうでしたね」

「私は見てはいなかった」

「そうだというのだ。」

「随分とな」

「あらゆる場所を彷徨い、そして」

「そして？」

「冬の中の荒れ果てた茨の陰に身を覆われ」

「彷徨ってきたのか」

「そう」

まさしくそうなのだった。

「そしてようやくここに」

「今は春だ」

グルネマンツは穏やかな声で彼女に告げた。

「もう冬ではない」

「はい、確かに」

「そして戻って来たのか」

「それでなのですが」

「それで？」

「城は」

クンドリーはこのことを尋ねてきた。

「どうになりました？」

「少なくともだ」

ここで首を無念そうに横に振ってみせて言うのだった。

「もうそなたが骨を折ることはない」

「ないのですか」

「騎士達は戻った」

グルネマンツはまずそのことを話した。

「クリングゾルの城に彷徨い込んでいたあの者達はだ」

「左様ですか」

「あの男は滅んだのだな」

「はい」

これはクンドリーも知っていることだった。

「それはもう」

「しかしだ」

「しかし？」

「もうそなたが動くこともないのだ」

「そうなのですか」

「そうだ。だからわしもここにいる」

こう話すのだった。

「我等はこのまま静かに倒れていくのだ」

「倒れていくのですか」

「わしもまた。だからいい」

「左様ですか」

「ところでだ」

ここでグルネマンツは話を一旦置いた。そうしてだ。

「聞きたいことがある」

「今度は一体」

「来たのはそなただけか？」

「私だけとは？」

「もう一人連れて来たのか？」

それを問うてきたのである。

「まさかとは思うが」

「いえ、私だけです」

「そもそもこの城に近付けるのは騎士達や小姓達、そしてそなただけだ」

こう言うのだった。

「しかもあの姿は」

黒い鎧兜にマントの騎士だった。顔は面で見えない。左手にもやはり黒の楯があり右手には槍がある。その騎士がやって来たのである。

その彼を見てだ。グルネマンツはまずは考える目になってからだ。そのうえで彼に声をかけるのだった。

「ようこそ」

その彼への言葉だった。

「道にお迷いなら教えてられるが」

だが彼は首を穏やかに横に振るだけであつた。

「違うというのか」

それには首を縦に振る彼だった。

「そうか。それではだ」

彼に対してさらに言うのであつた。

「わしに御挨拶は控えられるのか」
その問いにも首を縦に振るのだった。

第三幕その二

「左様か。しかしだ」

グルネマンツはさらに彼に話す。

「わしはそうはいかん。貴殿が来られた場所は聖地」
まさにそれだというのだ。

「ここにはその御姿で入られる場所ではない故」
こう話してであった。

「しかも今日がどうした日かはご存じないのか」
また首を横に振るその騎士だった。

「左様か。では何処から来られた？」

それにも答えなかった。首を横に振るだけの騎士だった。

「わからないか。しかしだ」

だがここでグルネマンツは話した。

「今日は聖金曜日。そして」

そのことを話してそうしてだった。

「ここでは武具は外してもらいたい。主を傷つけない為に」
だからだというのである。

「如何なる武具ももたずその神聖な血を罪深い世の罪を購う為に流されたのだから」

この言葉を受けるとだった。騎士はまずは槍を置いた。ただ立たせただけであつたが槍はその場所に完全に立った。そして楯を置き兜を外す。するとそこから出て来たのは。

「何と、貴方は」

「お久し振りです」

パルジファルであつた。彼は微笑んでグルネマンツにはじめて挨拶をしてきた。

「貴方とはかなり以前に御会いましたね」

「まさか……」

「はい、私です」

微笑んだままでまた述べたのだった。

「再びここに来ました」

「かつて私が出した貴方が」

グルネマンツは驚きクンドリーは見ている。その中での言葉だった。

そうしてだ。グルネマンツは驚きながらさらに言うのであった。

「どんな道を辿ってここに。それにこの槍も」

「おわかりですね」

「ええ」

槍を見ているうちにだ。彼は次第に恍惚となっていた。

「その通りです」

「迷いと悩みの様々な道を歩いてきました」

ここでまた話すパルジファルだった。

「そこであらゆる悲しみと死、そして喜びと生を見てきました」

「左様でしたか」

「この森のそよぎを再び耳にしました貴方に会えました。しかし」

「しかし？」

「ここは何か変わったのですか？」

それを問うのだった。

「何か」

「その前にですが」

「はい」

「誰を訪ねる道だったのでしょうか」

グルネマンツが今度問うのはこのことだった。

「それは」

「あの方です」

パルジファルは遠くのものを見る目で述べた。

「あの方の深い嘆きをかつての私は愚かにもただ聞くばかりでした」

「はい、あの時は」

「しかし私はあの方に救いをもたらすべき者だと思ふ次第なのです」
「そしてここに」

「その為に多くの道を巡ってきたのでしよう」
そしてこの城に戻るまでの道についても言うのだった。

「遠い島国に入ったこともあればあの温かい永遠の都に入ったこと
もあります」

「あの都にですか」

「そして夜の世界を愛する騎士も見ました」

彼が見てきたのは実に多くのものだったのだ。

「それに」

「それに？」

「神々の黄昏も。白鳥の騎士も愛の女神もです」

話に熱はない。だが確かな言葉で話していくのだった。

「恋人を歌により得た若者も愛により救われた彷徨い人も」

「全てをですね」

「見てきました」

まさにそうだという。

「それに」

「それに？」

「数知れない苦しみや戦いも見ました。私はその中で」
槍を見た。その聖なる槍をだ。

「この宝を守ってきました。戦いには使わずに」

「そうされてきたのですね」

「槍は汚されませんでした。そして」

若者はさらに話した。

第三幕その三

「今ここに聖杯グラールに添うべき聖槍ロンギヌスは戻りました」

「これこそ神の奇跡であり恵みです」

グルネマンツはここまで聞いて恍惚となった。クンドリーもその隣にいる。

「貴方が槍と共に戻られたそのことです」

「奇跡ですか」

「そして幸せでもあります」

「そうでもあるというのだ。」

「ここはその聖杯の聖地です」

「はい」

「そして騎士達が貴方を待っています」

「このことも話すのだった。」

「貴方がもたらす救いが必要なのです」

「それがだというのですね」

「貴方が前に来られたあの日から」

彼はさらに話した。

「王はその傷と魂の悩みにあがられるうちに」

「悲しまれてきたのですね」

「貴方と同じく」

「まさにそうだというのだ。」

「その中で死を望まれるようになりました」

「遂になのですね」

「そう、遂にです」

「そうだったというのだ。」

「騎士達の言葉もその姿も王の苦しみを止められず」

「あの聖なる務めですか」

「できなくなりました」

今のモンサルヴァートのことも話すのだった。

「聖杯は納められたままです。守護者は聖杯を仰ぎ見る限りは死にません」

「はい、それは」

「ですから見ることを止められてそのまま死を迎えようとされているのです。」

「何ということか」

「我々もです」

そしてグルネマンツ達もなのだった。

「その中で弱り衰え聖戦も絶えています。ただこうして城や森の中にその身をうなだれさせております。先王もまた」

「ティートウレル王もですね」

「はい、あの方はもう」

グルネマンツの語るその顔が殊更悲しげなものになった。

「やはり人です。我々もまた」

「私があの時気付いていれば」

パルジファルはそれを聞いて深く嘆いた。

「この様なことにはならなかったというのに」

「しかしそれは」

「愚かだった」

その嘆きは続く。

「何も知らなかったことは罪だったのか」

「いえ、そうではありません」

だがグルネマンツはここで彼に告げた。

「それはです」

「違うと」

「全ては主のお導きなのです」

「あの尊い主の」

「左様です。ですから」

そう話している間にだ。クンドリーは水を入れた鉢を持って来て

いた。そしてそれをパルジファルにかけようとする。しかしであった。

グルネマンツがそれを止めた。そのうえでの言葉であった。

「待て」

「何故？」

「そうするのではない」

彼女に穏やかに話すのだった。

「神聖な泉そのものがこの方にだ」

「この方に？」

「水を受けさせて回復させるということだ」

こう語るのである。

「だからだ」

「それで私は」

「それにだ」

グルネマンツはさらに話す。

「今日のうちにもこの方が何かを果たすのではと思うのだ」

「何かをですか」

「その神聖な務めを」

また言う彼だった。

第三幕その四

「それで今少しの汚れも起こらないように」

「どうされるおですか？」

「長い迷いの旅路の塵を洗い落として差し上げようと思う」

「わかりました。それでは」

「ではこちらへ」

グルネマンツは彼をある場所に導いた。そこは泉だった。

その泉のほとり来ると二人で彼のその鎧を外していく。そうしてその黒い騎士の装束の姿を見た。そのうえでだった。

パルジファルは自分から話してきた。

「それでなのですが」

「はい」

「今日のうちに王のところに案内して頂けるでしょうか」
こう言ってきたのである。

「それは駄目でしょうか」

「いえ、無論です」

グルネマンツはそれは言うまでもないと答えた。

「是非共。それは」

「そう言って頂けますか」

「それにです」

「それに？」

「今日はその先王の葬儀の日なのです」

このこともパルジファルに話した。

「そしてその今日に」

「王が聖杯をです」

「その通りです。御子息の罪故に倒れられた先王の為に」

出すと話すのである。

「尊い御身を清める為に王は務めを通じて罪をあがられるという

のです」

「では今から」

クンドリーはその間に彼を清めていた。服の上からであつてもだ。またグルネマンツは彼女が水を汲みに行くその間に彼の身体を清め服を替えていた。何時しか彼は騎士の白銀の見事な礼装になりそしてマントも羽織つていた。その姿になつていく中でクンドリーに声をかけるのであつた。

「御前は私を清めてくれた」

「はい」

「今度はだ」

その厳かな言葉で語っていく。

「旧知の懐かしい手で頭を潤してもらいたい」

「それでは」

グルネマンツが出て来てだ。片手で泉の水をすくいパルジファルの頭にかけた。そうしてそのうえで彼に告げるのであつた。

「清らかな人が純らかな水で祝福されるように」

「有り難き言葉」

「あらゆる罪の憂慮の思いがこうして御身から消え去る様に」

「これを」

クンドリーは聖油を取り出してそれをパルジファルの身体にかけていく。忽ちのうちに彼のその身体をかぐわしい香りが包んでいく。

「貴方はです」

「私は」

「あの方を救われてです」

グルネマンツは彼にこのことを話すのだった。

「そしてです」

「私はそれで終わりではないと」

「そうです。それからなのです」

今語るのはこのことだった。

「王の悩みを救われ」

「そうして」

「その最後の重荷をどうかお外し下さい」

「あの方が望まれるのなら」

「一も二もないといった返答だった。

「喜んで」

「そうして頂けますね」

「是非共。そして」

「そしてですか」

「参りましょう」

「こう彼に告げるのであった。

「その聖なる場所へ」

「わかりました。それでは」

そしてであった。パルジファルは周りを見回してだ。また言うのであった。

「それにしてもです」

「何か？」

「今日は野原が何と美しく見えるのか」

周りを見回しての言葉だった。その朝の光に輝く森や草地、そして泉をだ。そうしたものを見回しながらそのうえで恍惚として語ったのである。

「前に私は不思議な花の群れに出会った」

「花のですか」

「その美しさを見た」

「こう語るのだった。

第三幕その五

「しかしこれ程まで和やかで優しい草や花の数々は見たことがない」

「一度もですね」

「旅の中でもなかった」

まさにそうだというのだ。

「全てのものがこれ程無邪気に好意ふかしく香っていたこともなければ」

「そしてですね」

「これだけ可愛らしく親しげに語り掛けてきたことはない」

これが彼の言葉であつた。

「今までは」

「これこそがです」

グルネマンツはその彼に対してまた語つた。

「聖金曜日の靈驗なのです」

「その日が」

パルジファルは彼の言葉を聞いてまた語つた。

「この上ない苦痛の日故の靈驗かと思うと」

「どうなるというのでしょうか」

「心が痛む」

そうだというのである。

「今日という日はおよそ咲きいでるものが」

「はい」

「息を吸い命を持つ全てのものが」

さらに話していく。

「ひとえに嘆き悲しんで泣く日に思える」

「それは違います」

だがグルネマンツはそれは否定した。

「罪深い者達の悔悟の涙がです」

「それがなのですね」

「そうです、それがです」

その言葉が続けられていく。

「野原を潤しこの様に草木を茂らせ」

「それによつてですね」

「その通りです。今こそあらゆる生あるものは」

パルジファルに対して恍惚として語る。

「主の恩恵の証に出会うことを心楽しく待ちながら祈りを捧げよう
としています」

「それが今日の日だと」

「そうです、今日です」

さらに話すのであつた。

「彼等は十字架の上の主のお姿をそのまま拝することはできません」

「それは」

「そうです、それはできません」

こう彼に語る。

「しかしです」

それでもであつた。彼にさらに話すのだった。

「救いを受けた者を仰ぎ見るようになりますがそれは」

「それは」

「主から救われた者とは罪の重荷や恐怖の境地から脱した者のことです。そして神の愛の犠牲によつて純潔または幸福な思いのする者です」

その言葉がさらに続く。

「野の草や花も」

さらに言葉が続けていくのだった。

「今日は人の足元に踏みにじられないことに気付いていますし」

「それもまた」

「左様です。それに」

言葉を続けていく。まだであつた。

「神が気高い労苦によって人を哀れみ人の為に悩まれた様に」

「それ故に」

「今日は人もその恩愛の心で踏む足も穏やかに草花を労わるのです。こついうことをまたあらゆる生き物が有り難く思うわけであり」

パルジファルは彼を見てその言葉を聞き続けている。

「その辺りに咲いていてです。枯れていくものも皆感謝の思いを持っています。それがそれも罪を清められた自然全てが今日こそ無垢無罪の日を迎えるからです」

クンドリーはグルネマンツのその話の間恍惚としてパルジファルを見ている。そして真剣かつ平静な顔で目に涙をたたえながらであった。

第三幕その六

そのパルジファルがだ。語るのだった。

「かつて私に微笑みかけてきた花達も全てしおれてしまった」
「花達が」

「あの花達も今日は救いに憧れているのではないだろうか」
「クリングゾルの城のあの花達のことである。」

「今は」

「そうだというのですね」

「クンドリー、そなたの涙も」

「今度はクンドリーに顔を向けての言葉だった。」

「祝福の露になった」

「私の涙が」

「そう、それが」

「こう語るのであった。」

「見るのだ。野は微笑んでいる」

「そういえば」

「わかるな」

「はい」

「その周りを見たクンドリーへの言葉だった。」

「それが」

「よく」

「そういうことだ。全てが清められるべきなのだ」

「そしてだった。遠くから鐘の音が聴こえてきた。グルネマンツはそれを聴いてまた言った。」

「午だ」

「午になったのか」

「そうです。ですから」

「行くというのだな」

「そうです。それでは」

こうしてパルジファルとクンドリーを導いていく。そうしてだった。空間がそのまま時間になりだった。彼等はそのまま宮殿の中に入っていた。あの広間にだ。そうしてそこにあの時と同じま王がいて騎士達や小姓達もいる。そのうえで聖杯の箱もある。だがそれだけではなくだ。棺もあつた。

その棺が誰のものかは言うまでもなかった。騎士達はその中央に置かれた棺も見てそのうえで悲しい声で語っていくのであつた。

「厨子の守れる聖杯を」

「聖き務めに待ちきたりしが」

「暗き棺が守るのは誰の為か」

「悲しく担われるのは誰の身か」

こう語っていくのだった。

「悲しき棺は勇士を守り」

「即ち聖なる力を守る」

「かつて神への奉仕に尽くせり」

「先王を導かれる」

その言葉が続く。

「神に守られ神を守りし」

「先王を倒したのは誰か」

「老いの重荷に敗れたる死ぞ」

「聖杯を仰ぐことを阻まれし身に」

「聖杯の恵みを仰ぐのは」

「先王に拒まれるのは何者ぞ」

こう話されていく。

「それは御身等の伴いきたれる者」

「罪深い守護者」

「今一度これを限りに務めを果たさんことを」

「守護者自ら望めば」

「この度を限りに」

「今こそ」

そうしてであつた。さらに話すのであつた。

「悲しむべき聖杯の守護者」

「我等はこれを最後に貴方に務めを促す」

「今を最後に」

「これを限りに」

「そうだ」

王は身体を起こし弱々しい声で語る。その声は以前より弱いものだつた。

「悲しくも辛いこの身の上に禍いあれ」

こう言つてであつた。

「できればそなた等の手で死なせてもらいたい。死こそが私の罪深さに対する最も寛容な務めだ」

そして棺を見てでたつた。

「父上も私の為に。勇士の中でも一際気高く祝福された勇士」

それが彼だというのだ。

「かつては天使達からも敬意を表された純潔至極な父上」

その悲しい言葉が続く。

第三幕その七

「ひとえに死を願った私が何と御身を死なせたとは。今は神々しい輝きに包まれて親しく主を仰ぎられた父上よ、今一度主の祝福が騎士達を蘇らせるものならば何とぞ主の聖なる血潮にとって皆があらたな命を恵まれるように」

「王よ、それは是非」

「御願います」

「最後に」

「父上よ、御冥福を」

まだ父王に対しては言う。深い嘆きの顔で。

「そして私は今日を限りに」

「その様なことは仰らずに」

「それは何とぞ」

「わかつているが。だが」

しかしなのだった。

「私はそれでも。死こそがこの心臓を蝕む毒を癒してくれるもの。父上」

また父の棺を見ての言葉になっていた。

「何卒主に我が息子に安らぎを与え給えとお伝え下さい」

「では箱を」

「そしてお務めを」

また言う騎士達だった。

「どうかここは」

「御願います」

「わかつている。だが」

王は小姓達が出てきたそれを開こうとする。しかしであった。途中で手を止めてだ。そのうえでの言葉だった。

「駄目だ。最早私には」

「王よ、しかし」

「それはです」

「だが私は」

それでも言う彼だった。

「もうこれを開いて生きることは」

「できないと言われるのですか」

「それは」

「最早私にはできはしない」

項垂れた顔で語った。

「できれば私には死を。今すぐその癒しを」

「しかしです。それは」

「我等には」

「頼むのだ」

こう言うばかりになっていた。

「そして他の者がだ。聖杯を」

「いや」

しかしであった。ここでパルジファルが出て来たのであった。そのうえで王の前にやって来た。その右手にはあの槍がある。グルネマンツとクンドリーは騎士達の中にいる。

「それには及ばない」

「貴殿は」

「私は遂に辿り着くことができたのだ」

その槍を静かに携えての言葉であった。

「貴方の御前に」

「私の」

「だからこそこれを」

その槍を王の傷口である脇腹に当てた。するとであった。

それである赤かった傷口が消えていった。忽ちのうちにだ。そして王の顔にも生気が宿った。

「おお………」

「そして」

右手の槍を王の傷口から離しそのうえでの言葉であった。

「幸あれ」

「幸が」

「そう、貴方に」

こう王に告げたのである。

「罪を贖われ清められよ」

「そして」

「お務めは私が代わりその憂いも悩みも私が背負おう」

「我が憂いも悩みも」

「共悩の最高の力と至純な知の力が何も知らないこの愚か者にその憂いを共にさせてくれたのです」

こう言い終えると彼は部屋中央にきた。そのうえで周りの騎士達に告げたのである。

「今この槍を」

「おお・・・・・・」

「その槍こそは」

「そう、今この聖槍を貴方達のところへ持ち帰ったのだ」

己が高々と掲げるその槍を見ていた。それは全ての者がであった。
「今ここに。傷口を塞いだこの槍から再び聖なる血潮が滴り落ちてきている。今奇跡が起こったのだ」

「そうだ、奇跡だ」

「奇跡が再び」

誰もがそれを言う。そして彼は自ら聖杯に近付いく。すると箱は自ら開き聖杯が出て来た。それを手に取り高々と掲げる。神々しい光が全てを照らすのだった。

「聖杯は光を放つべきもの。全てを救う為に」

「聖杯のこの上ない救いの奇跡を」

「今こそ救いを」

「全てに對して」

騎士達もそれに唱和する。クンドリーは静かにパルジファルと聖杯の前に出てそのまま見上げたまま倒れ事切れた。その顔には満ち足りた笑みがあつた。

アムフォルタス王とグルネマンツは彼女の亡骸を運ばせるとパルジファルの前に跪いた。騎士達も小姓達も彼を囲んで二人に続く。聖杯の光が彼等を照らし続けていた。

舞台神聖祝典劇 パルジファル 完

2010・3・2

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4859p/>

舞台神聖祝典劇パルジファル

2011年4月28日00時58分発行